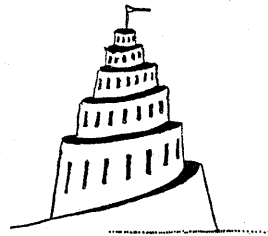


「……………ではない」



蕪木寿江

バスから降りると一目散に走って来る。「かぶらぎと  
しえ先生、おはよう。先生としえだもんね、お姉ちゃん  
に教えて貰ったんだよ。」と、年長組になった始めての日  
から友達がびっくりするような痾高い声で得意そうに喋  
る。

それから二日目、黒板に書いてあるきょうの月日のす  
ぐ下に、「ではない」と小さく書かれてある文字を見つ  
ける。例えば、4がつ12にちではない。もくようびでは

ない。というふうに、「は」の使い方もわきまえている。  
何日続くかなと思っっているうちに今度は、その日の数字  
が明日の日に変っていたり、昨日の日だったり、あゆみ  
シールを貼るお友達が「先生、違っている」と言うのを  
横で聞いていて、「やったー」という表情で、「にたっ」  
とする。「Tちゃん数字を書くのは上手だけれど、お友  
達がわからなくなるからね。」と言うと、「うん、うん」  
と首を縦に振るが、一のバスできて最後の四のバスまで

続く。黒板の字をそおと直しておくが、すぐに消して書く。「ではない」も、四日間続いたので、又続くのかな、と、白墨も黒板消しもそのままにしておく。もう黒板には書かずに一人ひとりに指で教えてあげていると、自分も「教えてあげようか」と言ってシールを貼るところを指でさしている。

外に誘って遊び始めるとさっと小さい身体をひるがえして部屋に戻り、白墨を握る。文字を書くことが好きなので、ノートをつくって渡した。どんなに喜ぶかなと思ったのだが、そのまま道具入れにしまったままに思っただけ、手紙を書いて渡したが、声をだして読んだだけでずぐにかばんに入れていた。クラスの友達の靴は隠されており、そのいたずらの瞬間を見極めようとしていた矢先、隣の年少組のお弁当がなくなつた。「お腹がすいて可哀想だから、皆も一緒に探しましょう、」と言うと、「知らない、わからない」と言いながらも積木のところ、ブロックの中、おままごとの棚を探したがなかった。次の日の午後、何気なく見た他の子どもの道具入れの奥に

ブルーのお弁当箱の袋が見えた。「よかったわねえ、」とほっとして子ども達と話していると、傍にいたTちゃんが、「もうしない、もうしない」と早口で言っている。抱き寄せて背中を撫でると、「もうしない」と言いながら腕の中から逃がれようとしている。

悩んだ末、お母さんに電話をかける。「年少組の終りの頃は投げなくなつたし、隠さなくなつたって言われたんですけどね……。家でも外へは滅多に出ないんですよ。どうしたらいいでしょうね。」と言われる。「子どもは誰でも自己中心ですし、Tちゃんは特に話をするのが好きなので、一対一でよく聞いてあげて相手になってあげることですね。」と言うと、「畑に行っているわけでもないのに、年寄がいると忙がしくて……。なかなか聞いてあげられないんですよ。三人も子どもがいるとね……。わざわざいらっしやらなくてもよく言っただけですすから」と言われた。

ご両親の協力がなければとても教育はできない、と私自身だんだん弱気になって、登園してくるTちゃんを構

えて待つようになる。相変らず一番に走ってきては「かぶらぎとしえ先生、おはよう」を部屋の入口で待っている私めざして大声で言う。「きょうはなんのいたずらをするのかな」と、そんな眼を感じる時もあるのだが、朝の元氣な挨拶にきょうは大丈夫——と、不安を払って迎える。

「Yちゃんの靴がない」と言うと、あらぬ方からすぐに持ってきたり、又、友達の靴を隠そうとしていたところと合うと、「今、Kちゃんの靴を持って行ってあげるの」と顔色を変えずに話す。身体が小さいので負けずに大きな声を出すのか。広い家にお年寄と住んでいるから声が自然に大きくなるのか。自分を常に認めて貰いたくて次から次からいたずらを考えるのか。

六月に家庭訪問に行くと、両手を高く上げて飛びあがって喜んでくれた。「先生が来るのが嬉しくて、門の前で一時間も立って待っていたんですよ」とお母さんが言われた。その日のあの無邪気な表情がいつも脳裏から離れない。

夏休み前に年長組の絵を市民ギャラリーに持って行った。横浜市の主催で六才以上の小学生までの絵を一堂に展示する。会場は山下公園に近く、展示会の帰りに船を見ながら家族でお弁当を食べるのもよいと思うし、記念品として素敵なデザインのバッチを全員にくださるのがいい。九月一日にその時の絵と一緒にバッチを「ごほうびよ」と言って一人ひとりに渡すのが又嬉しい。四ツと三ツの箱に入っている。出したり入れたりしてかばんにしまう。

Tちゃんも喜んで手に持っていたのに、あつという間に窓から外の栗畑に投げてしまった。二学期の初日である。そのまま知らん顔を試みる。その方がいいかなと思う。「どうして捨てたの」と聞いてみよようと思う、でもだまっていた方がいいと思う。いや、ここで怒るべきだと思いかえす。

「どうして投げたの？」と聞くと、「いらぬもん」と言う。手に持っている空箱をいじくりながら言う。「先生、このバッチ大好きなの。きれいな色でしょう。Tち

ちゃんのお兄ちゃんもお姉ちゃんも持っているのよ」と話すと、「えっ、お姉ちゃんも？」いくらか動揺した声がかえってくる。

一緒に担任しているM先生に、「Tちゃんが欲しいよ」うだった探がしに行つてね」と言つて年長組の始業式にでる。草は生えているし、小さいもの(一・五坪四方)だし、なかなか見つからないだろうと思つて、「一のバスが出てしまつてもいいから、ゆっくり捜していてね」と頼む。「もうしない、もうしない」を言っていたが、光っていたのですねにわかつたそうだ。「M先生と一緒に見つけたんだよ」と、遅れてホールに入つてきて得意そうに言う。「よかつたわね、大切にしてね。」と小声で話す。いつも窓から見てる栗畑に垣根を越えて、M先生と二人だけで行つたということが、バッチがあつたことよりも何よりも嬉しかったのだろう。

運動会も過ぎて外で遊ぶ姿も見られるようになった十月のはじめに、各種目をやり終えて集めた体力テストの用紙がなくなつた。ピアノの上になど置いておく方が悪

いと思ひながらも思ひきつて、「Tちゃん、体力テストのあの紙持つてきてね」と言う、舞台のカーテンの下からすぐに持つてきた。「ありがとう」だけ言つてふれなかつた。

次の日は、運動会の紙芝居をつくると言つて、プログラムを横におき、一番から描きだした。「ハトポップ体操弾いてー」「お花の体操」「次はオリンピックマークだよ」というように始めのところだけ弾くと、喜んで歌いながらさっさと描く。自分を認め、自分の為に弾いているということがTちゃんにとってはこの上ない満足だったのだろう。

昔の笑い話の紙芝居七巻セットを借りたと話すと、その度に、自由画帳に○巻、題名、枚数を七巻まで書き通す。バザーやさんごっこでは、くじ引きの番号とあつた玩具の番号を合わせる役で年少さんに売っている。M先生が入院したことを話すと真先に、「しんばいす。あしはいたいのですか」と手紙を書く。椅子に乗って黒板の中心に○を書き、左右に一つずつ増していつて下ま

で○で埋める。二百まで知っていることを前に聞いていたので、「○の中に数字を入れてみる？」と言うと、「うん」と弾むような声で書きだす。「69の次はなんだっけ」と顔を見る。「70よ」と言うと言うと安心して遂に終りまで書き続ける。

この一ヶ月間、いたずらをしていない。友達を求めたのかもしれない。声もいくらか小さくなった。いろいろの事を試しながら人として育っていく為の生き方を模索していたのだろうか。我々大人もそうだ。子どものよさを保存し育てるのが保育でありながら、観察者の眼になっていないか。保育者ではない、と書かれてしまいたい——。きょうも又、「ねえー、かぶらぎとしえんせい」と呼んでいる。呼ばれなくてもふりむけないものか。言葉にならない内面的な声が聞けないものか——。

(神奈川・市が尾幼稚園)

